



Title	ドイツにおける1921年3月行動の諸問題
Author(s)	上杉, 重二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 26, 1-11
Issue Date	1976-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29128
Type	bulletin (article)
File Information	26_P1-11.pdf



[Instructions for use](#)

ドイツにおける1921年3月行動の諸問題

上 杉 重二郎

Einige Probleme der Märzaktion 1921 in Deutschland

Jujiro Uesugi

1

本学部「紀要」第22号、1973年において、私は1921年3月にドイツでおきたゼネラル・ストライキおよび武装蜂起運動、すなわち3月行動 Märzaktionを一つの例として、「時代区分にかんするエッセー」¹⁾を書き、これを定年退官される鈴木朝英教授に献げた。

3月行動はわずか10日あまりの事件であるけれども、これを瑣末な一片の労働者運動として忘れ去ることができないのは、第一にこれがドイツというヨーロッパの心臓部で起きたからであり、²⁾第二にこの運動の中心になり、広い意味でその指導にも当たったドイツ合同共産党VKPD²⁾が、第三インターナショナル、共産主義インターナショナルKIの、ロシア共産党を別とすれば、世界最強の共産党であって、3月行動はたんにドイツ合同共産党の活動であったのみならず、国際共産主義運動、したがって国際労働者運動の重要なテーマとなったからであり^{2a)}、第三には第一次世界戦争はヴェルサイユ条約および協商諸国 Entente とドイツを含む同盟諸国との間の諸協定によって、一応のしめくりがなされたかのごとくであったけれども、当時すでにヴェルサイユ会議が平和会議に非ずして、新たな世界戦争を準備するものであると言われたように^{2b)}、ドイツの賠償問題、武装解除問題、ルール Ruhr の占領問題、また上部シュレジェン Oberschlesien のポーランドへ、あるいはドイツへの帰属をめぐる人民投票の問題など、ドイツの東西国境地帯はとくに、文字どおりなお硝煙がくすぶっていた時点で、3月行動が起きているからである。なお第三の理由にソヴェト・ロシアに対する帝国主義諸国の干渉戦争、またこれに対するロシア赤軍の攻撃、ことにワルシャワに迫るその攻撃などが、ドイツの国内情勢には決定的な影響を及ぼしていた事情が加えられる。

さらに3月行動の歴史的意義を考える場合に、注意を払わねばならぬことは、第四にこの運動が1919年ないし1923年秋にいたる革命的戦後機期 Periode der revolutionären Nachkriegskrise のまっ直中に起きているということである。この点については上に触れた『時代区分にかんするエッセー』でも述べておいたが、そこでは言ってみれば、歴史を考える場合に、あるいは同じことだが、物事を歴史的に考察する場合には、時代区分 Periodisierung という仕事がいかに大切であるか、そしてこれがいかに困難な仕事かということ、一般的に叙述したにすぎない。3月行動の評価ともこの時代区

いま3月行動の評価と言ったけれども、これは上述の諸事情から推察できるように、甚しく困難

である、というより、むしろさまざまな相反する、他を容れない評価がその当時も、また今日も存在する、と言うべきであろう。

一般的に、それぞれの階級の利害が露出する政治的危機の時期に起きた諸事件は、当然それらの、ドイツ人の好む表現で言えば、もっとも empfindlich 痛く感ずる、敏感な部分に直接触れるのであるから、相対立する諸階級がなお一層露骨にそれぞれの利益を守って、敵を打ちのめそうとするので、政治危機はいわばいよいよ加重ないし尖鋭化し、危機が終熄した場合も、がらこの政治危機をもたらした社会経済的諸要因およびよりグローバルな政治的要因が取り去られていないかぎり、つねに再燃、再発の契機が存続する。

2

前論では、3月行動の、ドイツ合同共産党内部のもっとも有力な反対者、批判者であるパウル・レヴィ³⁾ Paul Levi の次の言葉を引用しておいた：

「ドイツにおけるブルジョアジーの反配は — 政治的な意味では — もはやなら深刻な動揺を経験しなかった。……」⁴⁾

「国家権力を奪取するための、蜂起を組織する前提は、当時まったく存在しなかった。」⁸⁾

この認識から当然論理的に出てくる結論は、共産党がかような情勢にもかかわらず起した武装蜂起は、まさにバクーニンの無政府主義 — これがイタリア、イスパニアまたロシアで小市民、農民、半プロレタリアの間である種の共感を得たことはよく知られている — に基く暴動にほかならない、ということにならざるを得ない。

しかし問題は少なくとも二つある。第一には — もちろん暴力全能を主張し実行する日本のいわゆる新「左翼」なら、「無政府主義がなぜ悪いか」と居直るかもしれないが、これは理論的に克服された問題としてさておいて、— このレヴィの国内情勢の判断が果して正しいかどうかということであり、これについては前の『エッセー』でもほんの少し（16-18ページ）触れておいた。

第二の問題は、1921年当時はよりいっそう切実な問題として争われたのであるが、そして今日も主として反共という立場と労働者階級とその前衛の行動を総体として擁護するという立場との対立として論争が行われているのだけれども、それはドイツ共産党がその時果して武装蜂起を準備し、そしてこれを労働者大衆の先頭に立って遂行したのか、それともブルジョアジー、ユンカー（領地所有者）およびとくにプロイセンにおいて政権の座にあった社会民主党多数派が、国際、国内情勢を慎重に秤量して、まさに1921年の復活節⁴⁾を目指してきわめて細心に共産党の蜂起を「準備」していたのか、より適切な表現で言えば、挑発しようとしていたのか、これが問題である。

ここからなおいくつかの問題が派生する。派生といっても、決して副次的な意味しか持たないものということではない。第二の問題に関連して、仮にこの中部ドイツにおける労働者の蜂起が支配階級による奸計、挑発、待ち伏せ攻撃というものであるならば、なぜ合同共産党はその影響力を行使して労働者を抑えることができなかつたのであろうか — もとよりこのことが実践においてはいちじるしい困難を伴うものであることは、多少なりとも政治的行動のなかに身をおいた者にとっては、自明である。しかし歴史上にさような例がないわけではない。たとえば日本の第一次安保闘争において国会に対する請願運動を組織した日本共産党は、この運動が葬式デモなどとおとしめられながら、支配階級の武装力による挑発に最大限の注意を払って、これらの運動が無事に終ることに成功した^{4a)}。

それではその時ドイツ共産党幹部が抑制的な影響力を行使しなかったのは、すでにそのことが不

可能であったと判断されたのか、あるいは共産党内部にこの時点における武装蜂起の戦術を容認し、ないしは積極的に支持しようとした流れ、勢力が存在していて、抑制的な働きがなされなかったのではないか。たしかにこの時にはすでに極左的、小市民的無政府主義の分子は共産党から離れて分裂党、ドイツ共産主義労働者党⁵⁾ Kommunistische Arbeiterpartei Deutschlands, KAPD を作っていた。これを共産党の側から見れば、党は極左的潮流から解放されたというか、要するに浄化されたことになる。

もちろん国際労働者運動の最大の指導者レーニンが 1920 年 4 月 / 5 月に書いた『“左翼急進主義”、共産主義における小児病』(レーニン:全集 第 31 卷 [第 4 版])には、とくに『ドイツにおける“左翼”共産主義。幹部——党——階級——大衆』という一章が含まれるという事情もあって、ドイツ共産党に強い影響を与えた。そして実践の上でも同党は 1921 年 1 月に有名な『公開状』⁶⁾を全ドイツ労働組合連盟 Allgemeiner Deutscher Gewerkschaftsbund, ADGB を始めとする、すべての全国的な労働組合およびドイツ共産主義労働者党を含むすべての労働者党に対して示し、きわめて広い統一戦線^{6a)}の実現を目指した。この『公開状』に対してレーニンは、コミンテルン第 3 回大会の席上で、「『公開状』は政治的行動として模範的である。……『公開状』は労働者階級の多数を獲得するための実践的方法として模範的である」⁷⁾と絶讃した。このようにこの時期の合同共産党は明らかに、左翼急進主義、セクト主義——簡単に言えば、少数の精鋭な「共産主義者」が火の中に飛びこんで騒ぎを起せば、大衆はおのずとついてくるし、革命的情勢は作られるといった、一種の裏返しの自然発生論、大衆追随主義——から脱しつつあった。

3

しかしながらもちろん左翼急進主義を強める要因もあった。その一つは、というよりもっとも重要な要因はと言うべきであろうが、共産党外の労働者の一部さえ含めて、ことに党员の間に右翼社会民主主義者に対する強い不信、憎悪がみなぎっていたことである。レーニンは 3 月行動の評価にかかわって「ドイツの数万の最良の人々、数万の革命的労働者は、ブルジョアジーやその英雄ノスケーの一味、ブルジョアジーの直接の手下たち、シャイデマン Scheidemann たちによって……打ちのめされ、拷問を受けて殺された。……すべての誠実な、階級意識ある労働者には……信じられぬほどの鋭さで、古いドイツ社会民主党に対する憎悪が目覚めてきた。この憎しみが人々を盲目とした……⁸⁾」と、とくに社会民主党多数派の領袖の名を挙げて、この正当な憎悪がしかし誤った戦術——左翼急進主義的戦術と結びつくことを指摘した。事実すでに述べたリープクネヒト、ルクセムブルクらの殺害、また同じ 1919 年 1 月のベルリン警視総監アイヒホルン Emil Eichhorn (独立社会民主党員)の罷免に対する抗議を機として起きた 1 月闘争、また 1920 年 3 月のカップ Kapp 暴動後の広汎なストライキ運動、部分的には武装闘争などに際して、共産党员は社会民主党多数派幹部によってバリケードの向う側に立たされ、銃火を浴びせられ、彼らの多くは牢獄に坐するか、さもなくば鳥のように自由な、つまりいかなる法律の保護も受けない身とならねばならなかった。もちろんレーニンは労働者の「古い社会民主党」に対する憎悪をそのまま肯定したわけではない。むしろ冷静であれ、「冷血に」正しい戦術を作り出すようにと忠告している。しかしこの憎悪とかなり広汎な労働者が無政府主義的戦術に追いやられたことは、無縁ではなかった。

さらに合同共産党内部の左翼急進主義的潮流を考える場合に、この共産党と独立社会民主党との合同そのものについて検討してみる必要がある。1945 年 5 月にソヴェト赤軍によってベルリンは

解放され、第三帝国の、ナチスのファシスト支配はその生命を絶たれた。よく知られているように、ドイツ軍は東部戦線にその圧倒的部分を集中し、これに反して西部戦線にはいわゆる奇妙な戦争 *Komischer Krieg* が続いていた。しかし第二次世界戦争のほとんど最後の段階でアメリカとイギリスとは、一つにはスターリンのかねてからの強い第二戦線結成の要求を無視することができなくなり、他にはソヴェト軍の荒浪のような進撃がエルベ河は愚か、ライン河にまでも達するのではないかとの強い危惧を持つにいたり、戦後の世界支配とのかね合いで、ついにヨーロッパ大陸に上陸作戦を行うこととなった。そしてドイツの西の3分の2を占領するに至った。その後のソ連とアメリカ、イギリスとの主として外交的な交渉についてはここで述べることを避けるが、要するにポツダム会議を経てドイツを暫定的に四つの占領地区に分かつことが合意されたのである。その結果もっとも早く諸政党の政治活動が認められたソ連占領地区（すなわち現在はドイツ民主共和国の領土）においては、ドイツ共産党、ドイツ社会民主党がそれぞれ主として民生の安定に全力を尽しつつ、1933年にヒトラーの政権獲得を許し、しかもドイツ国民自らの力によってファシズムを粉碎できなかった事実を深く反省し、そしてドイツ労働者階級の分裂こそがその敗北の最大の理由であることを認めて、合同に向ったのであった。両党の1946年4月における統合は、苦難に満ちた闘争を永きにわたって続けたドイツ労働者階級の頭に載せられた輝く冠であるとされる。西の諸占領地区ではかような統合が行われなかったばかりか、共産党が非合法に追いやられるという事態が生じたのであるから、ソ連占領地区においてドイツ労働者階級が、物質的窮乏はさておき、政治的には有利な状況下にあったことが分る。社会民主党員が1945年5月の解放以後マルクス主義の古典を読み、共産党員との討論、あるいは実践上の協力を重ねて、次第にマルクス主義＝レーニン主義の基盤に立つに至ったかは、たとえばオト・ブホヴィツ⁹⁾ *Otto Buchwitz: Brüder, in eins nun die Hände*, 兄弟よ、いま手をとりあって一つに, Berlin 1956によっても明らかである。

しかしながらこの有利な条件の下にありながらも、両党の合同は決して簡単ではなく、さまざまな問題がその早急な実現を客観的には強く要求していたけれども、一挙になされたというわけではない。第一にドイツが一つである如く、両党もそれぞれ全国的な一つの党であったから、西の占領諸地区の党の部分との関係をどうするかということは、たとえ首都ベルリン、したがって両党それぞれの本部がソ連占領地区内にあったとは言え、もちろん無視してよい問題ではなかった。この間の事情を詳しく述べる暇がないし本論からも外れるから他に譲って¹⁰⁾、一つだけ触れておかねばならぬことは、共産党は本来マルクス主義＝レーニン主義の上に立っているのだから、一応問題はないとしても、社会民主党員にとっては古い右翼ないし中央派の社会民主主義の残滓をとり去ることは、非常な努力を要したということである。しかも新たに誕生すべき統合党は理論的にマルクス主義＝レーニン主義の基礎の上に築かれねばならなかったから、この努力と目標達成とは至上命令であった。しかし長い古い伝統とそしてアメリカ、イギリス帝国主義者の支援を受けた西に在住する社会民主党員からの絶えざる働きかけ——破壊工作、窃盗のそそのかしを含めて——に敗けて、少なからぬ党員が西へ走った。もとより多数の者は共産党員と実践において協力し、思想改造に努めた。そして思想的訓練という点から見れば早すぎるという意見もあったが、とにかく一定の思想的発展が行われ、社会経済的、国内、国際的政治的要請に答えて1946年4月についてドイツ社会主義統一党 *Sozialistische Einheitspartei Deutschlands, SED* が成立したこと¹¹⁾；前述のとおりである。しかも一つには経験の深い共産党員の多くがナチスによって殺されたために、かなりの部分の党員が未熟であったという事情も手傳って、ドイツ社会主義統一党にとっては依然として思想的訓練が大きな課題であった。

このような歴史的経験を顧慮するならば、1920年12月の合同共産党成立に至る過程、および結党後の経過が、いかに苦渋に満ちたものであったかということは、容易に想像しうるところである。また事実ここでも1945年以降とは比較にならない困難な条件の下で思想的修練が行われ、しかも旧共産党員に比べて旧独立社会民主党员がほとんど2倍以上の数であったにも拘らず^{11a)}、合同後はその出身党を問わぬほど融合が進んだ。

ここのところまでは歴史的事実としてほぼ間違いないところである。しかしいま問題としている合同共産党内部の左翼急進主義的偏向がそれぞれの党の出身者に同じように作用したのか、それとも一方により強い影響を及ぼしたか、という点になると、実際はいま述べたように融合が進んで両党出身者がそれぞれのブロックを形成したわけではなく、またそれぞれの党の出身者の間においても当然のことながら、一つの鑄型から作り出された人間ではないから、そこにさまざまなニュアンスがあることも認められるのではないか。しかしこの点はまだ確定できない。

いうまでもなく「左翼」がベルリンで強かったことは、よく知られている。アルカディ・マスロー¹²⁾ Arcady Maslow、ルート・フィシャー¹³⁾ Ruth Fischer、エルンスト・ロイター¹⁴⁾ Ernst Reuterなどのインテリゲンチヤがベルリン＝ブランデンブルク管区 (Bezirk Berlin-Brandenburg) を牛耳っていた。ドイツは日本と違って首都だけに最高学府があるわけではなく、むしろベルリン大学はもっとも新しい大学の一つであったけれども、そしてまたドイツ諸邦にはそれぞれ首都と政府機関とがあって、ベルリンだけに官僚機関が集中していたわけではないが、やはりここはドイツ国 Reich の一大政治中心地であるから、官吏を中心として都市プティ・ブルジョア層が厚く、おのずとインテリゲンチヤルな雰囲気があり、それが労働者党にも反映して、この地域において小市民的インテリゲンチヤ出身の幹部が生れ、彼らの指導下にあった党员大衆がまた小市民的無政府主義に結びつきやすかったことは、当然考えられる。

マスロー、フィシャーまたロイターらはいずれも生粋の共産党育ちである。しかしいまのところ合同共産党員のうち、共産党出身者がより急進左翼的で、独立社会民主党に籍をおいていた党员がどちらかといえば、右翼的かと言うこともできない。3月行動の実際にたたかわれた中心はザクセンであるが、ここはがんにらい共産党の強かったところであった。ここで武装蜂起が開始されたとき、ベルリン＝ブランデンブルク管区の労働者が真っ先にこれに呼応して起ち上がったかといえば、もちろんここでは権力体制が強いなどの事情があるにしても、ベルリンはむしろ平静であった。あるいはひより見という態度であった。これに反してとにかく対応の態勢を示したのは、エルンスト・テールマン¹⁵⁾ Ernst Thälmann らが指導していた——この独立社会民主党左翼の幹部であった労働者が先頭に立った——ハムブルク管区であった。

3月行動にかんするもう一つの問題は——そして本論では最後にとりあげる問題としたいが——ドイツ共産主義労働者党 KAPD との関係である。KAPDは前述のように、共産党の約3分の1の党员を引きさらって分裂したのであるが、そのことは少なくともその時点において、この党の左翼急進主義が相当に広汎な労働者大衆にも影響を及ぼしたことを物語っている。つまり共産党から見てKAPDは無視できない存在であった。事実3月行動において、とくに戦闘の重要な拠点となったロイナ Leuna (メルゼブルク Merseburg 近郊、西南3kmほどの町) 化学工場では、KAPDと共産党との合同の行動委員会が作られて、闘争の指揮に当たっていた。

また中部ドイツの戦闘でそれこそヴィルヘルム・テルのような活躍をし、最後は捕えられて特別裁判所で死刑の判決を言い渡されたマクス・ヘルツ¹⁶⁾ Max Hoelz が非常に精確にKAPDの党员で

あったかどうかは、多少疑点が残るし、その思想もマスローヤルート・フィッシャーとは違って、もっと直接的なテロルを主張する無政府主義であったけれども、彼が KAPD にひじょうに近かったことは事実である。

ロイナでは、予想されることながら、闘争の方法などについて KAPD と共産党との意見がしばしば一致せず、しかもかなり強く前者の見解が貫かれた。その結果ロイナ工場は多数の労働者とある程度の武器を持ちながら、もっぱら守勢に立ち、結局保安警察部隊と国防軍砲兵部隊とに包囲され、まづ熾烈な砲撃を受けてたちまち陥落してしまう。

ヘルツに対する共産党の態度は、これまた一貫せず、その部隊に一種の目付役を附けたりするが、ヘルツが政治的に無意味な破壊や掠奪を行うことを阻止することができず、いわばヘルツないし KAPD に引き廻された結果となっている。

要するに3月行動における共産党の戦術なり、また実際の行動なりは、相当に KAPD の影響を受けていた、と言わざるを得ない。

それではなぜ共産党はかの「公開状」の精神、統一戦線戦術に立って、断乎として KAPD を拒ける、あるいはこの極左党に対してきぜんとした態度をとることができなかつたのであろうか。それが出来なかつた理由は、第一にいまも述べたように、無政府主義的気分が広く労働者大衆の間に広がっていたことに求めなければならない。つまり KAPD 傘下の、ないし影響下の大衆を、お前たちは勝手にしろ、と言って放り出すことは許されないのである。前に触れたように有名な「公開状」も、KAPD がその宛先の一つとなっている。しかし第二に指摘しておかねばならぬことは、国際共産主義運動における共産党と共産主義労働者党との関係である。ドイツ共産党は共産主義インタナショナルのドイツにおける公認の支部 Sektion である。他方 KAPD は 1920年11月にコミンテルンによって同調的な党として受け入れられている（脚注5、9 ページ）。ドイツ共産党がコミンテルンによって正統のマルクス主義的労働者党として受け入れられたことは、言うまでもなく当然のことであるけれども、KAPD の左翼急進主義はコミンテルンにもよく知られており、この思想がそれぞれの国の労働者運動の発展を妨げるという事実は、レーニンが鋭く、しばしば、しかも詳しく指摘していた。したがって KAPD がたとえ正規の支部としてではなく、同調的な党という限定付であれ、コミンテルンの運動への参加が認められた理由は、これまたこの党がドイツ国内の労働者大衆に相当な影響を及ぼしていた点に求められる。

したがって KAPD がその極左的教条主義、孤立主義のゆえに、次第に労働者の支持を失い、しかも他方共産党の内部に3月行動で見られるようになおも左翼急進主義的潮流が強く残り、労働運動に及ぼすその害毒は見過すことができなくなったので、レーニンはコミンテルン第3回大会（1921年6-7月）において左翼急進主義に対して再び徹底的な批判を行うこととなった¹⁷⁾。

このレーニンの批判、レーニンの「政策への抵抗は、ほかならぬ共産党内で非常に大きかつたのである。激しい討論と対立する潮流が起つた」¹⁸⁾とトリアッティ Palmiro Togliatti が述べているとおりであった。その時点においてはとくにドイツ共産党代表の反対が強かつたことは、第3回大会議事録の随所に明らかである^{18a)}。よくひとは共産主義者の大会というのは、幹部が報告をしてその他大勢は拍手でもしていればいいものだと思つているようであるが、このコミンテルン第3回大会といひ、これを受けて同年8月イェナで開催されたドイツ共産党第7回党大会といひ、その討論は激烈を極めたが、いまはその詳細には入らない。

ドイツ共産党内のある意味での混乱が避け難いと見たレーニンは、ドイツの代表たちとしばしば

個人的に会談し、またイェナ党大会に間に合うように手紙を書き送った。1921年という年がロシアにとっていかなる年であったか。経済、ことに農業は依然として破局的状態にあり、軍事的にはクロンシュタット事件¹⁹⁾が起き、帝国主義諸国の支援を受けた白衛軍はようやく撃退したけれども、なお国外でその再起を狙っているのみならず、日本帝国主義軍が度重なる敗北にもかかわらずなおシベリアから撤退しようとしめない。ソヴェト・ロシアにとっては危機的状況が続いていた。そうしたなかで国家の首領でもあるレーニンが長文の手紙を送ったということは、彼がドイツ労働者運動の発展にいかにか大きな意義を認めていたかを物語っている。この手紙のなかで彼は KAPD を含むドイツの無政府主義者について、次のように述べている：

「ドイツにおいて我々はきわめて長い間無政府主義者に寛容であった。共産主義インタナショナル第3回大会は、彼らに期限付きの最後通牒をつきつけた。彼らがいまみずから共産主義インタナショナルから去って行ったのだから、いっそうよい。……古い社会民主党のひより見主義に対する憎悪から無政府主義へ傾いていた、すべての動揺している労働者に対して、またいまやとくに根本的にかつはつきりと示され、精確な事実によって証明されたのは、次の点である。すなわち共産主義インタナショナルは無政府主義者を決して即座に、また無条件では追い払わなかった、そのことを共産主義インタナショナルが寛容をもって示したということである。」²⁰⁾

このようにレーニンは疑いもなく共産主義者が無政府主義者に対して寛容であったことを肯定している。この肯定が正しかったかどうか、それはドイツ労働運動の全発展史のなかで見極められなくてはならない。

1975年9月3日

(附記：本論文は、1975/1976年の文部省科学研究費の支持を得たことを機として、予定されている仕事をまとめる手掛りという意味で書かれたものである。)

<注>

1) 上杉重二郎：時代区分にかんするエッセー — 1921年3月行動について — 北海道大学教育学部紀要 第22号, 13-18ページ。

1a) 近来中国共産党がその国際的な反ソヴェト連邦、反インタナショナルイズム、したがって反共産主義と小ブルジョア的な民族主義の立場から、世界の国々を、1.アメリカとソ連という超大国、2.第3世界の国々、3.その中間の国々に分けている。そして第3世界の独立運動、すなわち民族解放運動が現在世界史を動かす唯一の力となっているという考え方が強く打ち出され、多くの信者を持つに至っている。しかし第一にこの「分類」についていえば、アメリカという世界最強の帝国主義国と世界最大の社会主義国とを同一のグループに属せしむることは、ちょうど子供のなぞなぞ、「鯨とにわりのたまごとの共通点は？」「両方とも生きている」という程度の科学性しか持たない。第2グループについても同じことで、西ドイツや日本と東ドイツやチェコスロヴァキア社会主義共和国とが、どうして同じグループになるのだろうか。中国共産党の「理論家」たちは、国家にとってもっとも本質的なものを捨象して、国家の寸法を測って分類しているらしい。もっとも寸法の大きな自国、内モンゴルやチベットまで含めた中華人民共和国が第3世界に入っているところを見ると、寸法ばかりが規準ではないらしい。このやり方は、中国が第3世界において覇権をとえようという下心があると疑われても致し方がない。

ヴェトナムの解放、その決定的勝利はアジア情勢を大きく進歩の方向に変え、アメリカ帝国主義の侵略政策に重大な打撃を与えた。

〔ちなみにこの勝利は第1にヴェトナム人民の犠牲の多い、忍耐深いたたかい、そしてまた何よりもマルクス主義＝レーニン主義的戦略、戦術によって武装したヴェトナムの共産主義政党的指導によってかちとられたものである。(この政党的役割の大きさは、ヴェトナムの解放戦争と近東諸国におけるそ

れと比較してみれば、一目瞭然である。)しかし第2に挙げるべきは、中国共産党のいうところの「ソ修」による軍事的、経済的支援であって、この援助がヴェトナムと地つゞきの中国の政府によって妨げられなかったとすれば、ヴェトナムの勝利はよりいっそう早まっていたであろう。もちろん日本国民がアメリカの軍事基地を撤廃し、その他アメリカの侵略戦争に対する忠実かつ積極的支援をいっさい拒否していれば、アメリカはヴェトナムにおいて有効な戦闘を行うことがいちじるしく困難となり、あれほど多くの血がそこに流れることはなかった。]

要するに第2次世界戦争後の旧植民地、半植民地、現在の言葉で云えば開発途上国における民族解放闘争の意義は、今日いかに強調しても強調しすぎることはないが、そのことによって資本主義世界体制と社会主義世界体制との本質的対立、また資本主義国内部におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの和解し難い矛盾と闘争を、捨象し、もしくはその歴史的意味を過小評価することは、もとより許されない。

ドイツの問題をとりあげるのは、筆者がヨーロッパ中心主義 *Europazentrismus* に立っているからではなくて、1921年を含む革命的戦後危機期においてドイツの動向が全ヨーロッパの、したがって全世界の運命に決定的な影響を及ぼし得たし、また事実及ぼしたからである。ウルブリヒト *Walter Ulbricht* も指摘したように、1918年11月革命が真のドイツ社会主義共和国を導いていたとすれば、たしかにドイツ国民はナチス時代を「節約」できたであろう。そのことは、第2次世界戦争なしの世界史の発展を予想させるものである。

- 2) Die Vereinigte Kommunistische Partei Deutschlands は、1920年12月にドイツ共産党 KPD とドイツ独立社会民主党 (左翼) USPD との合同党会議において創立された。

この合同は、ハレにおける 1920年10月の USPD 臨時党大会において、多数を占めた左翼が共産主義インタナショナルへの加盟と KPD との合同とに賛成投票を行なった後に、実現した。これに続いて中央派 (カウツキー *Kautsky* 派) 分子が党大会から退場したので、USPD は分裂した。

VKPD の第2回大会 (1921年8月イエナで開催) において、党は再び以前の KPD という名前を称することとなった。

USPD の中央派 (右翼) は残滓独立社会民主党 *Reste-USPD* と呼ばれていたが、やがてドイツ社会民主党 SPD (多数派社会民主党) へ戻った。

- 2a) 1921年4月19日のコミンテルン執行委員会 EKKI の決議は: 「3月行動の問題における戦術的な意見の相違にかんしては、EKKI はこの問題を、その大きな国際的意義にかんがみ、コミンテルン第3回世界大会に提起し、ドイツの同志たちが第3回世界大会に対してすべての資料を委ねるように配慮することを要求する」 (*Die Kommunistische Internationale, 1921* *** Nr. 17, S. 365) と述べている。

- 2b) きわめて独創的な、そして不屈に自由と進歩のためにたたかい、それゆえにナチスの迫害を受け、事実上強制収容所で殺害されたオシエツキ *Carl von Ossietzky* (1889 - 1938, ポーランド貴族の出身、第1次世界戦争後「2度と戦争するな *Nie Wieder Krieg!*」行動委員会の組織者として、ブルジョア平和運動に尽した。1933年2月の帝国議会議事堂炎上謀略事件の夜、ファシストに逮捕され、強制収容所に投ぜられた。1936年、佐藤栄作のそれとはまさに180度異なった角度において、ノーベル平和賞を授与され、これとともに彼の拘禁に対する国際的抗議が昂り、ついにナチは彼を釈放せざるを得なかったが、収監中の病状が重く、サナトリウムでゲシュタポの監視下に死去した。) は、「ヴェルサイユ条約は……、憎悪と復讐とを神聖化し、あらゆる下劣さを祖国のために動員した時代から生れたものだ」 (*Das Besiegte Deutschland, Berliner Volks-Zeitung, 1. Dezember 1920, in: Ossietzky, Reichenschaft, Hrsg. von Bruno Frei, Weimar 1970, S. 38*) とこの条約の本質を平和と民主主義の立場から明かにした。

- 3) *Levi* は 1883年 *Hechingen* (*Tübingen* 南方25km) に生れ、1930年ベルリンで死んだ。1908年以來弁護士。学生のころからドイツ社会民主党員であったが、1914年法廷で R. ルクセムブルクを弁護して以来、その影響下に党内左派、すなわち「国際派」(後のスパルタクス団 *Spartakusbund*) に属するようになった。*Levi* は生涯絶えずルクセムブルクとの結びつきを強調し、彼女の遺跡をつくる者は自分だと

いう自負心を示した。彼はことに彼女とレーニンとの「対立」を浮彫りしようと努め、彼女の未完の原稿『ロシア革命論』Die russische RevolutionあるいはZur russischen Revolution(現在はRosa Luxemburg: Gesammelte Werke, Band 4, Dietz Verlag Berlin 1974に所載)を、彼自身の序文(Vorwort und Einleitung zu Rosa Luxemburg „Die russische Revolution.“ In: Paul Levi: Zwischen Spartakus und Sozialdemokratie, Wien/Frankfurt 1969)を附して1921年に刊行したのも、この目的のためであった。

彼は1918年11月11日のスパルタクス団創立に当って、幹部会員に選ばれた。ドイツ共産党創立後もその地位にあり、1921年2月まで幹部会に属したのみならず、1919年1月に最高幹部カール・リープクネヒトKarl Liebknecht, ロザ・ルクセムブルクがノスケNoskeら社会民主党多数派の了解の下に、軍国主義的將校らに殺害された後、同年2月に党議長となった。合同共産党成立後も、独立社会民主党出身のドイミヒ Däumig とともに、幹部会議長の地位を占めた。1921年2月22-24日の中央委員会において、その多数とイタリア共産党問題をめぐって意見が対立したので、幹部会員および議長を辞任した。3月行動の直後に、これについては本文で述べるが、この党の行動を暴動 Putschだと公然と、つまり党の外の出版物などで、非難攻撃したので、規律違反のゆえをもって1921年4月15日に除名された。Leviは1921年9月に反共的な共産主義労働共同体 Kommunistische Arbeitsgemeinschaftを設立したが、翌年2月には残存独立社会民主党に、またさらに9月には社会民主党に復帰するようなことになった。しかし弁護士としてリープクネヒトとルクセムブルクの殺害者を告発する仕事を最後まで続けた。

- 4) 復活節の週間は、復活節の日曜日に始まるが、休日となるのは、復活節以前のキリスト受難聖金曜日 Karfreitag から月曜日 Ostermontag までの4日間が普通のものである。なぜこの日どりを問題にするかと言えば、1921年においては、聖金曜日が3月25日当り、ブルジョアジーは当然労働者のゼネラル・ストライキないしは武装蜂起を予想して、それが復活節の休みにうまくひっかかり、労働者たちが職場を離れて家に帰ってしまうように、蜂起開始の時期を仕組んだことが、考えられるからである。
- 4a) もとより安全保障条約〔当時ドイツ民主共和国の諸新聞は、ときにこれを Unsicherheitspakt 非安全(物騒な)条約とアイロニをこめて表現した〕反対闘争全体の評価は、更めて根本的に行う必要がある。
- 5) KAPD。1919年KPDのハイデルベルク党大会において小市民的インテリゲンチヤの影響の下に、一部の左翼急進主義者が党から脱離して、1920年4月にこの党を結成した。KPDの約3分の1の党员がこれに加った。KAPDは1920年11月にコミンテルンによって同調的党として認められ、これに関わることとなった。しかし結局コミンテルンの政策を拒否して、1921年の第3回世界大会後にはこれから脱退し、その後影響のない小セクトとなっていった。
- 6) Die Rote Fahne, Nr. 11 vom. 8. Jannar 1921
- 6a) 統一戦線そのものについては、いまここで詳論しないが、ドイツ共産党がきわめて早い時期に、すなわち1921年1月以前に、統一戦線戦術あるいは統一戦線政策 Einheitsfrontpolitik を打ち出していたことは、歴史的事実である。Kuczynski教授によれば、いわばこの統一戦線を越えて、国民戦線 Nationalfront, front populaire が反独占を軸として成立する社会経済的基盤がすでにこの時期に存したのみならず、現に Franz Mehring (1846 - 1919) がドイツ社会民主党の内部で、この方向を具体的に示していた。Kuczynski, Jürgen Zur Soziologie der nichtmonopolistischen Bourgeoisie. In: „Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte,“ 1962, Teil II, Berlin 1962 ならびに上杉重二郎: 現代の人民戦線 — クチンスキ「非独占ブルジョアジーの社会学のために」について。「思想」1967年8月を参照。
- Thalheimerは1922年2月26日のコミンテルン執行委員会の会議において「ドイツにおいて我々はずっと前から統一戦線の方法を戦術の定式としていた。……1918年末か1919年にかけて我々は労働者委員会 Arbeiterräteの共同行動のための機関を持っていた。……」(Taktik der KI gegen die Offensive des Kapitals, Hamburg 1922, S. 71)と述べている。
- 7) レーニン: 共産主義インタナショナル第3回大会における演説。全集 第32巻, 500 - 501 ページ。

- 8) レーニン：ドイツ共産主義者への手紙。全集 第32巻，552 ページ。
- 9) Otto Buchwitz. 1879年Breslau に生れ，1964年Dresden に死す。1898年社会民主党に入る。金属労働者。ベーベル Bebel の強い影響を受けた。1919年シュレジェン州議会議員。非合法活動のゆえに1933年9月デンマークへ亡命したが，1940年ドイツ秘密国家警察 Gestapo の手に落ち，解放まで Sonnenburg の強制収容所などに捕えられていた。
 ブホヴィツは「私がいま公然と承認することは，老社会民主党員として私がいまにもおそくレーニンとスターリンの文献の勉強を始めた，と言うことであつた」*Buchwitz:Brüder, in eins nun die Hände*, Berlin 1956, S. 30, 48)
- 10) 上杉重二郎：東ドイツにおける社会主義の形成，岩波講座，「現代」，第3巻，東京 1963を参照。
- 11) 上杉重二郎：ドイツ革命運動史，下巻，東京 1969年，381 ページ以下を参照。
- 11a) 合同共産党の成立によってマルクス主義＝レーニン主義の大衆党が生れたことは，確かであり，1921年初頭における同党幹部会の計算によれば，およそ40万ないし50万の党員を擁したとされた。しかし幹部会の1921年8月から1922年8月に至る期間の組織報告によれば，上の数字は非現実であつて「実際に存在している，党費を支払っている党員とは…一致していなかつた。」(*Weber, Stefan Die März-kämpfe 1921, eine ruhmvolle Kampfaktion des mitteldeutschen Proletariats. Mansfeld 1971, S. 13*)したがって— 上述の誤差がどうして生じたかは，いまここで述べないが— 党員数を共産党出身と独立社会民主党出身とに分かつて計算することは，はなはだ困難であつて，一応の見当となる割合を示したに過ぎない。
- 12) Arcady Wladimirowitsch Maslow, その最初の名は Isaac Tschemerinski, Исаак Чемеринский 1891年南ロシアにドイツ人を母として生れ，1941年ハヴァナに死す。1899年ドレスデンに移り，ドイツの法律に従つて氏名を変えた。後ベルリン大学に学ぶ。1920年以來ドイツ共産党中央委員。1923年秋以降彼と R. Fischer の極左政策は大きな影響力を持ち，1924年には幹部会政治局員に選ばれた。1926年，彼が逮捕された際に党の品位を貶める卑怯な態度をとつたこと，および極左的派閥活動を行つたことにより除名された。
- 13) Ruth Fischer. 1895年ライプツィヒにオーストリアの哲学教授の娘として生れ，1961年パリに死す。大学生のときオーストリア社会民主労働党に入った。1918年オーストリア共産党を創立したが，翌年ベルリンに移住し，ジャーナリストとして活動した。1920年ドイツ共産党に入り，1921-1923年中央委員。1924-1925年政治局員。1924年にはコミンテルン執行委員会候補，幹部会員に選ばれた。しかし分派のまた反コミンテルン活動を行つたため，1926年除名。1941年アメリカに渡り，市民権を得た。彼女が1948年刊行した *„Stalin und der deutsche Kommunismus.“* 「スターリンとドイツ共産主義」は日本でもよく知られているが，非常に感情的な筆致でコミンテルンとドイツ共産党とを誹謗している。
- 14) Ernst Reuter. 1889年シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州に官吏の息子として生れ，1953年西ベルリンに死す。ミュンスター，ミュンヘンおよびマルブルクの諸大学で歴史，ドイツ文学，経済学を学ぶ。1912年社会民主党員。創立以來の共産黨員。ベルリンで活動し，1919年10月以來幹部となつていたが，分派的活動のゆえに1922年除名された。彼は当初は極左の方針を主張していたが，1921年以降にわかには右翼より見主義的態度をとり，結局1922年に社会民主党に復帰した。1932年には帝国議会議員，1933年にはマグデブルク市長。ナチス時代は強制収容所，ついでトルコへ亡命し，アンカラ大学教授となつた。1947年大ベルリン市長となつたが，ベルリン分割政策に加担し，1948年には西ベルリン市長となつて，反ソ反共政策を続けた。
- 15) Ernst Thälmann. 1886年ハムブルク生れ，1944年ブヘンワルト強制収容所で殺された。1903年社会民主党員，1918年独立社会民主党左派に属し，1920年共産党との合同後新党の中央委員，1924年副議長，1925年議長となる。1933年ファシストに捕えられ，死に至るまで強制収容所にあつた。
- 16) Max Hoelz. 1889年 Riesa 近くの小村に農業労働者の息子として生れ，1933年ゴルキー郊外で死す。各地を，また種々の職業を転々とした。1918年独立社会民主党員，翌年共産黨員。すでに無政府主義的傾向を示し，規律違反により1920年除名。その年共産主義労働者党に入る。3月行動後拘禁中再び共産

ドイツにおける1921年3月行動の諸問題

党に復党。釈放（1928年）後ロシアで暮したが、ボートの事故で溺死した。

- 17) レーニン：共産主義インタナショナル第3回大会における演説。全集 第32巻，481 - 530 ページ。
とくに、共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説。498 - 509 ページ。
- 18) トリアッティ：共産主義インタナショナルの歴史にかんするいくつかの問題。トリアッティ：コミンテルン史論。青木文庫 1961年，147 ページ。
- 18a) 1922年2月／3月に行われたコミンテルン執行委員会では、これに対しイタリア、イスパニアおよびフランスの代表団がそれぞれ強く統一戦線戦術に反対し、最後に独自の決議案を提出するに至った。この案は否決されたが、このことによっても、第3回世界大会の大討議を経た後においても、なお左翼急進主義の潮流が国際労働運動のなかで、なかならずアナルコーサンディカリズムの伝統の強い国々では決して看過しえぬものであったことが理解される。しかしこれに対する闘争は、レーニンも指摘しているように、右翼ひより見主義思想に対する闘争に比べれば、はるかに容易なものであった。このことは本論に直接関係はないけれども、一言触れておく。
- 19) クロンシュタット事件。1921年3月にこのレーニングラードのすぐ西の港で起きた水兵と労働者の反ソヴェト叛乱。レーニンはこれがエス・エルやメンシェヴィキによって操られているのみならず、全土の白衛軍また帝国主義諸国に支持されていることを指摘し、赤軍は時を移さずこの人殺し集団を粉碎した。
- クロンシュタット事件が当時いかに反ソ反共集団を鼓舞し、したがってその哀れな決着がいかに彼らを失望させたかは、レーニンの指摘によっても明らかであるが、今日なおボルシェヴィキ「告発」をスローガンとしている反共産主義者、なかならず左翼くずれの新「左翼」と称する、右翼的傾向を強く有する無政府主義者によって、反ソ宣伝の材料にとり上げられていることは、多少の興味をそそる。たとえば、『現代の眼』1970年11月号。
- 20) レーニン：全集 第32巻，553 - 554 ページ。

注：注のうち伝記的なものは、主として *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Biographisches Lexikon*. Hrsg. vom Institut für Marxismus - Leninismus beim ZK der SED. Berlin 1970. によった。